大阪公立大学
Osaka Metropolitan University
学術情報リポジトリ

横笛「葉二」伝承考

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2022-04-20 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 妹尾, 恵里 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00017675

横笛「葉二」伝承考

妹尾恵里

はじめに

横笛「葉二」についての説話としては、いわゆる「朱雀門の鬼の笛」の話が様々な書物に見え、琵琶「玄象」と共に、異界の存在である鬼との関わりを持つ名器として伝承されてきた。とりわけ『十訓抄』に記される、源博雅が鬼と笛を交換する話と、浄蔵が鬼の感応を得た話とを合わせたものが、名器「葉二」の伝承として広く人口に膾炙していたようである。

先行研究では、稲垣泰一氏が鬼と関わりを持つ名器の説話について考察するなかで「葉二」説話にもふれている(1)。また、「葉二」は『御堂関白記』『殿暦』にも名前がみられ(2)、実在した横笛であることが確認されるが、これらの記事から、豊永聡美氏は、「葉二」が摂関家にとって重要なものであったと指摘する(3)。そして、磯水絵氏は、『説話と横笛―平安京の管絃と楽人―』(4)において、「葉二」説話の大要を概観している。これらの先行研究はあるものの、「葉二」説話の全体像をとらえるには、まだ考察の余地が残されているように思われる。

稿者は、楽器の名器伝承を研究課題に設定しており、「海賊丸」伝承を考察対象としたことがある。この「海賊丸」の場合、篳篥の演奏によって海賊の難を逃れる説話をもとに、後になって名前が付与され、名器伝承として展開していったと考えられる(5)。それに対して、今回取り上げる「葉二」については、文献に初めて名前がみられる時点ですでに名器として知られていたようであり、名器説話としての性質や方向性が異なるようである。

そこで本稿では、先行研究をふまえつつ、広く流布した『十訓抄』にみられる「葉二」伝承を中心に、その諸相を改めて概観・整理し、諸資料間の異同について検討を加えつつ、読解を深めたい。あわせて、それぞれの説話を伝承する人々の意識についても、

具体的に考察を加え、名器伝承の全体像を探る一助としたい。

一、「葉二」説話の諸相

「葉二」にまつわる説話は、『江談抄』『十訓抄』『説経才学抄』『二中歴』『東斎随筆』等にみられ、楽書では『夜鶴庭訓抄』『教訓抄』『続教訓鈔』『愚聞記』『糸竹口伝』『體源鈔』などに記される。まずは、「葉二」説話を記す書物のうち、もっとも成立が先行する『江談抄』の本文を掲げる(6)。

（五〇）葉二為高名笛事

又被命云、葉二者高名横笛也。号朱雀門之鬼笛是也。浄蔵聖人吹笛、深更渡朱雀門、鬼大声感之。自爾此笛乎給件聖人云々。其後次第伝之在入道殿。後一条院御在位之時、以蔵人某召此笛。蔵人不知笛名、只はふたつ参らせさせ給へと申ニ、入道殿、何事モ可承仁歯二こそえかくましけれ。若此葉二笛歟ト天令進給云々。

前半には浄蔵の芸道感応説話といえるもの、後半には道長の興言利口めいた説話というように、大きく二つの伝承が語られる。

次に、本稿で特に注目したい『十訓抄』第十「可庶幾才芸事」第二十話の本文を確認する(7)。

博雅三位、月の明かりける夜、直衣にて、朱雀門の前に遊びて、よもすがら、笛を吹かれけるに、同じさまに、直衣着たる男の、笛吹きければ、「たれならむ」と思ふほどに、その笛の音、この世にたぐひなくめでたく聞えければ、あやしくて、近寄りて見ければ、いまだ見ぬ人なりけり。われもものをもいはず、かれもいふことなし。かくのごとく、月の夜ごとに行きあひて、吹くこと、夜ごろになりぬ。

かの人の笛の音、ことにめでたかりければ、こころみに、かれを取りかへて吹きければ、世になきほどの笛なり。そののち、なほなほ月ごろになれば、行きあひて吹きけれど、「もとの笛を返し取らむ」ともいはざりければ、ながくかへてやみにけり。三位失せてのち、帝、この笛を召して、時の笛吹どもに吹かせらるれど、その音を吹きあらはす人なかりけり。

そののち、浄蔵といふ、めでたき笛吹ありけり。召して吹かせ給ふに、かの三位に劣らざりければ、帝、御感ありて、「この笛の主、朱雀門のあたりにて得たりけるとこそ聞け。浄蔵、このところに行きて、吹け」と仰せられければ、月の夜、仰せのごとく、かれに行きて、この笛を吹きけるに、かの門の楼上に、高く大きなる音にて、「なほ逸物かな」とほめけるを、「かく」と奏しければ、はじめて鬼の笛と知ろしめしけり。

「葉二」と名づけて、天下第一の笛なり。そののち伝はり

て、御堂入道殿の御物になりにけるを、宇治殿、平等院を造らせ給ひける時、経蔵に納められにけり。

この笛には葉二つあり。一つは赤く、一つは青くして、朝ごとに露おくといひ伝へたれば、「京極殿御覧じける時は、赤葉落ちて、露おかざりける」と、富家入道殿、語らせ給ひけるとぞ。

笛には皇帝、団乱旋、師子、荒序、これら四秘曲といふ。それに劣らず秘するは、万秋楽の五六帖なり。笛の最物には、青葉、葉二、大水龍、小水龍、頭焼、雲太丸、これらなり。名によりて、おのおの由緒ありといへども、長ければ略す。

このように『十訓抄』には、前半に二つの芸道感応説話が、後半には摂関家と関わる説話が記されている。次に、前述した「葉二」説話がみられる書物を取り上げて比較し、二書以上にみられる話題を概述すると、おおむね次の六つの話題に整理することができる。

①博雅三位が朱雀門の鬼と笛を吹き合い、お互いの笛を交換して鬼の笛を手に入れたこと。

②後に浄蔵が天皇に命じられ、朱雀門のあたりでその笛を吹くと、鬼が感嘆する声が聞こえたこと。

③天皇が笛を召し上げようとした際、使いの蔵人が「はふたつ」が笛の名前であると知らなかったので、道長が冗談を言いながら献上したこと。

④「葉二」と名付けられた笛は、「天下第一の笛」と珍重されたが、藤原道長の手に帰し、さらに頼通によって平等院の経蔵に納められたこと。

⑤富家入道（忠実）の言によると、京極殿師実が見た時には、葉が一つ落ち、露も置かなくなっていたとのこと。

⑥笛の四秘曲、万秋楽五六帖の伝、そして名笛の「最物」列挙のこと。

この六つの話題について、それぞれの書物の話題の出入りについて整理すると、次頁の表のようになる。

表中の項目「博雅」「浄蔵」「平等院の経蔵」「青い葉と赤い葉」の四つの話柄をもつ諸書は、『十訓抄』十ノ二十と同様に連続したかたちでこの四つの伝承を記載しており、基本的には同話と考えられる。この表からは、「葉二」伝承の中では、『十訓抄』十ノ二十のかたちのものが後世に大きな影響を与え、楽書類にも引き継がれたことが明瞭になる。このことは、第一に『十訓抄』が広く読まれ受容されたという事実を示唆する。一方で、ここにみる「葉二」伝承が、名器説話としての完成度を備えたものであったことも影響しているように思われる。次節以降、表にとった六つ

話題＼書名	江談抄	夜鶴庭訓抄	教訓抄	十訓抄（十）	続教訓鈔	愚聞記	説経才学抄	糸竹口伝	二中歴	東斎随筆	體源鈔（二）
博雅				○	○	○	○	○		○	○
浄蔵	○		○	○	○	○	○	○	○	○	○
歯、二つ	○	○			○		○		○	○	
平等院の経蔵			○	○	○	○	○	○		○	○
青い葉と赤い葉				○	○	○	○	○		○	○
秘曲、名器				○						○	

※書名の欄において、楽書はゴシック体で示した。

※『十訓抄』十ノ二十の欄を太枠で囲んだ。

「博雅」「浄蔵」「平等院の経蔵」「青い葉と赤い葉」の四つの話柄をもつ場合は、『十訓抄』十ノ二十と基本的には同話と考えられる。丸印を太字にした。

※特に『続教訓抄』は表の項目の他にも多くの「葉二」伝承を記載している（業平が朱雀門の鬼から手に入れたとする伝承、大戸清上が鬼から笛を手に入れたとする伝承など）が、それらは他の資料にみえないものが多い。表では割愛した。

の話題について、順を追って考察したい。

二、博雅三位と浄蔵の説話について

前節で整理した①と②は、博雅と浄蔵が、それぞれ、卓越した演奏技術によって鬼から感応を得るという伝承であり、芸道感応譚と呼ぶことができる。まずは、この二つの説話をみていきたい。

『江談抄』の前半には、②に該当する、浄蔵が鬼から感応を得る伝承が記される。「自爾此笛乎給件聖人云々」とある本文からは、浄蔵が朱雀門で吹いた笛とは別の笛を鬼から受け取り、その笛こそが「葉二」であると理解できる。しかし『江談抄』の表現はやや簡潔に過ぎ、意を尽くしていないように思われる。とりわけ、鬼が笛を吹いていたとも何とも記されないため、なぜこの鬼が笛を持っていたのかが不明瞭で、鬼が笛をくれたということも、少し唐突に感じられるのである。

このような文章の不明瞭さは、『江談抄』が言談録であるという書物の性格によるものとも考えられる。話者匡房と筆録者との間で予め共有されている情報は委細に語る必要はなかっただろうし、また筆録者が記録するまでもないと判断したとすれば、書き留められなかったとしてもおかしくない。ここでも、浄蔵と鬼との出会いについて、省略に付された情報もあったのではないだろうか。

これに対し、『十訓抄』には①と②に該当する伝承が、詳しく記されている。すなわち、博雅が鬼から笛を得て、その笛を浄蔵が朱雀門で演奏したとあり、「葉二」の来歴が理解しやすい記述となっている。

ただし、『十訓抄』の説話には、事実性を考えた際にいささか問題がある。すなわち『十訓抄』では、博雅が「失せてのち」に浄蔵が笛を演奏したということになっているが、二人の生没年を考えると、博雅の没年が天元三（九八〇）年、浄蔵の没年が康保元（九六四）年であり、浄蔵が先に没しているので、明らかに年代上の矛盾がある。このことについては、『続教訓鈔』編者狛朝葛が十三世紀頃にすでに気付いていたようで、『続教訓鈔』が『十訓抄』十ノ二十の同話を掲げる箇所に、注記のような形で生没年の矛盾を指摘している(8)。

さて、「葉二」という笛の名器伝承について、博雅と浄蔵の説話は早くから注目されていた。前掲稲垣氏の論考も、この説話に注目したものである。それでは、この話が浄蔵や博雅の生存時以降、いつ頃から形を成していたのだろうか。確定的なことは言えないが、既に『江談抄』の段階で、話者と筆録者との間には、これに類した伝承が共有されていたとも考えられる。成立が先行す

るからと言って、必ずしも『江談抄』が原型に近いとは言えないのではないだろうか。

「葉二」伝承の、説話の原型については三弥井書店「中世の文学」所収『東斎随筆』の補注(9)に次のような指摘がある。

朱雀門の鬼から笛を貰ったという説話は、主人公の名が伝わっていなかったか、浄蔵上人にまつわる話であったかが、本来の姿であったのだろう。それに博雅三位が加えられたために、年代的な矛盾が生じたのである。博雅三位の名が加えられたのは、一つには彼が笛の名手として名高かったからだが、もう一つ、鬼と博雅三位との間に説話的連想が作用していたのではなかろうか。今昔物語集巻二四の二四話に、博雅三位が羅城門の鬼から玄象をとり戻す話があり、『江談抄』巻三に、彼が笛を吹くと鬼瓦が落ちたという話がある。

ここで指摘されるように、『江談抄』に名が見えないからと言って、博雅の説話が後世の後付けとは限らない。博雅や浄蔵といった具体的な人名はともかく、鬼と笛を交換する型の説話も、古くからあった可能性がある。反対に、先行する書物に見られない叙述があるからといって、『十訓抄』編者による付加とも限らず、『十訓抄』のかたちの「葉二」伝承がすでに流布しており、それを取り込んだ可能性も高い。また、右の指摘にもあるように、そこに博雅が付会されることには、それなりの必然性があったのである。このことについては、稲垣氏の指摘もある(10)。

鬼と名琵琶〈玄象〉、また〈葉二〉にまつわるいくつかの伝承を見てきたが、名楽器を名楽器として、その秀逸なること、またその権威、神秘性などを示す方法として、その楽器の道の祖たる人物、またはその楽器の名手として名声を博した人物に関連づけて、説話が構成されていることが窺える。また、それは特に鬼、それも羅城門、朱雀門の鬼と結びついた形で、芸能話として伝承されている傾向がある。名手はその道に達した才能、精神の持ち主であり、鬼もその才能、精神に感嘆するのである。つまり、名手と鬼とが心を通わせるというところに、これらの説話のテーマがあるのである。

この指摘のとおり、博雅は、貴種につながる親王の子で、勅命を受けて『新撰楽譜（博雅笛譜）』を撰した人物である。しかも、『東斎随筆』の補注でも指摘されているとおり、他にも鬼と関わる伝承を持つ。鬼と笛を交換する説話にぴったりの人物であったといえよう(11)。

さて、①や②のように、笛の名手と鬼とが音楽を介して通じ合い、結果として異界の名笛がもたらされたという伝承は、名器説話として普遍的な型のものと言える。それが、『江談抄』の断片

的な記事の背後にふまえられていた可能性は高い。名器「葉二」をめぐる伝承は、このような話形に沿って構想され、そこに「楽器の名手」とされる人物が適宜あてはめられることによって生成し、伝承されたものと考えてよいだろう。

三、「歯がふたつ」説話について

次に、『江談抄』の後半にあり、③に該当する、「歯がふたつ」の伝承について考えたい。なおこの伝承は、『十訓抄』では、前掲の十ノ二十にはみえないので表に採らなかったが、別の箇所である『十訓抄』第七「可専思慮事」第二十九話に記されている。次に本文を掲げる。

宇治殿、葉二といふ笛を伝へ持たれたりと聞こしめして、内裏よりある蔵人して、かの笛を召されけるに、御使は、御はふたつ、召しある由ばかりを申して、笛といふことを申さざりければ、老後に歯二つ、召され候ふこと、術なき由、御返事に奏せられたりけるも、一つの不思議か。

前に本文を掲げたとおり、この伝承について、『江談抄』は蔵人を介した「後一条院」と「入道殿」（道長）とのやり取りとしていた。周知のように、後一条院は道長女彰子所生の待望の外孫にあたり、道長との年齢差は四十二歳に及ぶ。道長の発言は、直接的には名笛の名を知らぬ無知な蔵人へ向けられたものだが、この種の軽口・興言利口は、天皇が鍾愛の孫であるという関係性を前提にしたものとも解される。実際、天皇の意を伝える蔵人相手に、このような冗談を言ってのける道長の姿は、『大鏡』以下の諸書に伝えられる、道長の磊落な人物像によく適うものがあるともいえよう。

ところが、ここで掲げた『十訓抄』第七では、『江談抄』が「入道殿」とするところを「宇治殿」としている。この人物の異同については、話末に記される「葉二」がその後どうなったかの記事と、不可分に関わる可能性がある。『江談抄』では「令進給云々」とあり、後一条院に献上したことが明記されていたが、『十訓抄』第七では、「術なき由、御返事に奏せられたりけるも、一つの不思議か」とあるだけで、天皇に献上したかどうかをはっきり記さない。ささいな文章の異同にも思われるが、実は『十訓抄』十ノ二十では「葉二」が平等院の経蔵に納められたと明記しているのである。したがって、もし『江談抄』のように天皇に献上してしまったという説を採ると、『十訓抄』の内部で所蔵先が天皇のもとか摂関家かで矛盾がおきてしまう。この矛盾を避けるために、『十訓抄』編者が調整して記した可能性が考えられる。

そもそも、『十訓抄』の「葉二」伝承が二箇所に分かれている

のは、篇目にあわせてのことであったと考えられる。すなわち、博雅と浄蔵とが登場する話は、異界の存在である鬼をも感動させる名手の奏楽の徳や、楽器の神秘性を語る説話と理解されたので、第十の「可庶幾才芸事」の篇目に採られた。その一方で、「葉二」を「歯が二本」にとりなす興言利口めいた説話の方は、当意即妙な機知のはたらきを伝える逸話として、第七の「可思慮専事」に採られたわけである。このように、『十訓抄』編者が「葉二」という、ひとつのものに付随する説話を篇目にあわせて振り分けるという操作を行ったとするならば、『十訓抄』において「入道殿」が、「宇治殿」頼通に置き換えられた可能性も考えられる。

それではなぜ、「入道殿」から「宇治殿」になってしまったのだろうか。この伝承の同話を採っている書物のうち神田本『江談抄』などでは「後冷泉院」と「入道殿」となっている(12)。史実から言うと、道長は一〇二七年に没しており、後冷泉天皇は一〇二五年に生まれたので、道長との接点はせいぜい二年ほどである。また、後冷泉の即位は道長没後十七年余のことで、この組み合わせは、説話が伝わる内に人名に錯誤が生じたかとも思われる。しかし『十訓抄』は、この説話で摂関家側の人物を「宇治殿」(頼通)としている。このことについては、神田本『江談抄』などのように、天皇を「後冷泉院」とする伝承があって、それに合わせて、年代の見合う人物として頼通を選んだ可能性も考えられる。

しかし、より重視すべきは、「葉二」が「平等院」の「経蔵」に納められたとする十ノ二十の言説との関わりだろう。この伝承については次節で考察するが、平等院の経蔵とは、摂関家の所有に帰した宝物が最終的に収蔵されるという、いわゆる「宇治の宝蔵」である。「宇治の宝蔵」は、その創始者とされる宇治殿頼通と不可分な関係のものと認識された。この間の事情に通じる者にとって、天皇からの「葉二」献上の要求に対処する人物としては、道長ではなく頼通こそがふさわしいと想定されたのではないだろうか。その結果、道長の人物像に適う興言利口が、頼通の人物像にはややそぐわない印象を与えることになっても、大事なことは「宇治の宝蔵」との関わりだったのだろう。

このように考えると、『十訓抄』は『江談抄』の短い記事が示唆する「葉二」伝承の総体を取り込む際に、かなり意識的であったように思われる。この問題については、中原香苗氏や福島尚氏の指摘が参考となる(13)。まず中原氏は「葉二」伝承に即して、「『十訓抄』編者が「楽器名物譚集成」から説話を抜き出す際、『十訓抄』での目的にあわせて、説話の構成を改変したり、あるいは一箇所に記されていた説話を要素ごとに分割して用いているようであ

る」と指摘している。また、福島氏は『十訓抄』全体を視野に入れ、『十訓抄』が出典から説話を改変する際には「必ずしも一書のみによらない、諸知識の相互注釈的・重層的な利用態度がある」とし、単に各編の主題に合わせるための加工・改変だけではなく、「個々の話題に対する編者なりの「注釈」的な眼差し」があったであろうと述べる。両氏の指摘は、『十訓抄』において二箇所に分割して記される「葉二」伝承を理解する上で、重要な示唆となるだろう。

この「歯がふたつ」の伝承は、前掲の表に示すとおり、楽書では記されないことがある。これは、「歯がふたつ」の伝承が、芸道感応説話や楽器の神秘性を語るものではないということに起因すると考えられる。また、「歯がふたつ」の伝承を記さない書物は、特に『十訓抄』十ノ二十とかなり同文に近く、そのまま引き継いでいるようであり、『十訓抄』が第十と第七に切り離してしまったことに影響を受けている可能性もあると考えられる。

四、「葉二」の実像と「宇治の経蔵」

さて、ここまでは、『江談抄』『十訓抄』の、博雅と浄蔵の説話、そして「歯がふたつ」の説話についてみてきた。次に、『十訓抄』の後半の説話についてみていきたい。

『江談抄』では、浄蔵の話のあとに、「其後次第伝之在入道殿」とあってから「歯がふたつ」のような摂関家や天皇が関わる伝承が記されていた。『十訓抄』でも、浄蔵の説話のあとには、「そのの伝はりて、御堂入道殿の御物になりにけるを」とあり、一致している。しかし『十訓抄』については、それ以下に語られる内容が『江談抄』とは異なり、前掲の話題の整理で④に該当する、「宇治殿」が平等院の経蔵に「葉二」を納めたという伝承や、⑤に該当する忠実の言談という、摂関家と関わる伝承につなげられている。この、④⑤の伝承については、『十訓抄』をさかのぼる資料にはほとんどみられないようである[14]が、ここでは、宇治殿が「葉二」を「宇治の経蔵」に納め、その後に師実が実際に見たことを忠実が話しているように理解できる。

さて、以下本節では「葉二」の実像を確認しつつ、④の伝承について考察したい。「葉二」は『枕草子』において「御前にさぶらふもの」[15]として名前が挙げられ、『御堂関白記』では寛弘七年（一〇一〇）正月十一日条に「従華山院御匣殿許、得横笛〈歯二〉、只今第一笛也」とあり[16]、寛弘七年（一〇一〇）正月十五日裏書では「御送物三種」の一つとして名前が挙がる。前掲論中での豊永氏は、皇位継承に伴って旧帝から新帝に相伝される「累代御物」となった楽器に注目し、その成立について考察する中で

「葉二」についても触れ、「葉二」が花山院から花山院御匣殿のもとへ渡り、それを道長が手に入れ、敦良親王の五十日の祝いに一条天皇に献上したとの見解を示す(17)。すなわち「葉二」は、天皇や摂関家にとって、重要な意味をもつ楽器のひとつであったというのである。このような実像をふまえれば、『江談抄』や『十訓抄』は、博雅や浄蔵の芸道感応譚から話題を移す際に、道長が手に入れたことを記すことで、実像に沿ったかたちで摂関家と関わる伝承へと話題を移しているといえよう。

さらに、『殿暦』康和三年（一一〇一）十二月廿五日裏書では、次のような記事がある。

裏書、辰刻許参御前、見御笛、其中葉二是笛名也、勝也、右大弁宗忠朝臣・四位少将宗輔朝臣・余候御前、御前御笛声実以神妙也

この記事では、忠実が堀河天皇のもとで「葉二」を見せてもらっており、「宇治の経蔵」にあるようには思われない。すなわち、天皇の御物となっているらしい古記録類と、「宇治の経蔵」に納められたとする説話とでは、所蔵先に矛盾があるようである。もっとも、『殿暦』康和三年の記事以降、貴族日記類には「葉二」の名前はみえなくなり、その後の実態は分からなくなる。この段階で、「葉二」の実態は失われてしまった可能性もあるだろう。

それでは、「葉二」が「宇治の経蔵」に納められたことについてはどうだろうか。「宇治の経蔵」もしくは「宇治の宝蔵」は、多くの宝物が納められた場所として、様々な説話に語られる。森正人氏は、いわゆる「宇治の宝蔵」に納められたとされるものには、必ずしも実在しなかったり、すでに失われたものも含まれたりすることを指摘している(18)。また、田中貴子氏は、宇治の宝蔵とその収蔵品の記事を取り上げ、現実の平等院の建造物から独立した象徴的な「宇治の宝蔵」像を持つようになることに着目し、摂関家の宝物を集める宝蔵に宝物を秘蔵することで世間から隔離し、そうすることで権威を高めていたと指摘する(19)。さらに田中氏は「秘蔵されるがゆえに世間には流布しない、という言説は、逆説的に架空の品々の実在感を高めるための修辞」となるとも述べている。

このことをふまえると、実態が分からなくなった「葉二」についても、「「宇治の経蔵（もしくは宝蔵）」に今もあるはずだ、あって欲しい」という思いが、このような伝承に結実したとも考えられる。忠実の祖父師実が実見した段階で、葉の一つが落ち、露も置かなくなったとされる「葉二」は、案外早い段階で失われたのかもしれない。しかし、そんな笛の名器が、「宇治の宝蔵」に入ったとすることで、その存在は理念の中で永続する。実際の平等院

の宝蔵は十四世紀に焼失したようだが[20]、逆にいえばそれまで「葉二」は摂関家の秘庫に秘宝化されていたと考えることもできる。まして『十訓抄』が成立した建長四（一二五二）年の頃には、平等院の経蔵なども現存しており、「あの中に「葉二」が今もある」という現実味のある伝承として、当時には理解されたかもしれない。

こうして「葉二」は、実態を失っても、「宇治の経蔵（宝蔵）」に入ることで、言説の世界で永遠化・特権化されるのである。しかし、後世に平等院宝蔵が失われたことが周知されるようになると、「葉二」も運命を共にしたと理解されたはずである。後世の楽書類の伝承においては、たとえ『十訓抄』と同文的な内容が記されていたとしても、それは『続古事談』の冒頭付近数話にみられるような「宝物喪失説話」の性格を備えたものとして理解されていたと思われる。

さて、ここまでに、前掲の表の話題①から④までをみてきた。このような一連の「葉二」伝承は、神秘的な名器がどこからきて、誰の手を経て、いまどこにあるのかを語るものだと言える。しかも、その起源は、名手の高い演奏技術が、異界の存在である鬼を感動させ、その交感の象徴として名笛がもたらされたというものであった。そんな神秘性をまとう名笛「葉二」は、天皇や摂関家に珍重され、今は「宇治の経蔵（宝蔵）」の秘宝となり、これからも末永く収蔵されるというのである。このように、過去・現在・未来に及ぶ「葉二」伝承は、それがどのくらい史実を反映するかとは関わりなく、人々が名器に寄せる思いを十全に語るものと評し得るだろう。

五、「葉二」の外見と正倉院楽器

それでは、前掲の話題の整理で⑤に該当する伝承はどうだろうか。ここでは「葉二」が、「この笛には葉二つあり。一つは赤く、一つは青くして、朝ごとに露おくといひ伝へ」られているという特徴的な外見が示されている。『御堂関白記』や『殿暦』では形状について記されないため実際のところは不明であるが、『十訓抄』に記されるような、説話における「葉二」の外見について考えてみたい。

現代の我々がイメージする横笛、特に龍笛としては、樺巻・漆塗りが施されたものが普通であり、「葉っぱが二枚付いていた」という『十訓抄』のような姿は考えにくいように思われる。しかし、『正倉院の楽器』[21]では、歌口のそばから小枝が生えている正倉院楽器が挙げられており、図版をみると、現代の龍笛にもみられるような樺巻・漆塗りの施されていないもののようである。

これは、正倉院に現存する四点の横笛すべて同様である。この横笛四点の中には、彫石横笛と牙横笛があり、材質が竹でなくとも節や小枝をかたどって制作されたことがうかがえる(22)。この正倉院楽器について林謙三氏は、次のように解説を加えている(23)。

横笛は一節のある竹をもつて作り、節には自然の小枝をつけるのが式である。竹製では根に近い方に吹口をうがち、根に遠い方を筒口とすることは尺八とは正反対である。そうしなければ小枝の向きが逆位置になるからである。この小枝は竹製のものは比較的大きく、後世の龍笛に見る痕迹的なものとは著しい差異がある。

「葉二」の形状には、このようなタイプの横笛が想起されている可能性がある。笛にできるほどの太さの竹から直接葉がついているとは想像し難いが、樺巻・漆塗りが施されておらず、小枝が付いていてその先に葉がついていたとすればどうだろうか。やはり現実的にはありえないが、想像しやすいものにはなる。もちろん、正倉院に納められているからといって、必ずしも平安時代以前の横笛の一般的な形状だと言い切ることはできない。しかし、樺巻・漆塗りの施されたものと比較して、正倉院楽器の横笛は素朴な造りとはいえそうで、横笛の原始的な姿に近いものであろうと推測することができる。

結局のところ、実在した「葉二」の形状についてはよくわからない。しかし、「この笛には葉二つあり…」という特徴的な外見の伝承は、「葉二」という名前から想起される命名の由来であろう。それとともに、異界からもたらされた神秘的な名器「葉二」が、正倉院楽器にみられるような素朴な造りを持ち、葉が付いたまま露が置くという霊力を帯びたものであるという含意を合わせて伝承されたのではないだろうか。

そもそも、「宇治の宝蔵」と正倉院宝物にも関わりがあった。『小右記』『左経記』等によれば、道長は寛仁三（一〇一九）年に東大寺で受戒し、その際に正倉院宝物を拝観しているのである。増記隆介氏は、そこに頼通も積極的に関わっていたこと、そしてそれが平等院経蔵の成立に影響を与えたであろうことを指摘している(24)。正倉院宝物の姿を誰もが知っているはずもないが、道長や頼通と正倉院宝物との間には、連想がはたらいた可能性もあるのである。

『十訓抄』の伝承としては、「京極殿御覧じける時は、赤葉落ちて、露おかざりける」という忠実の言談からも、京極殿師実のころにはすでに、「葉二」が、本来の完全な姿ではなくなってしまっており、名器としてすでに衰えていることが示されていることになる。つまり、この伝承もまた、宝物喪失説話としての側面を持

つともいえよう。「葉二」は「宇治の経蔵」に収蔵されているのだから、氏長者である師実が実見する機会があったとして不自然はない。また、音楽伝承に藤原忠実の言談が引用されることについては、すでに田村憲治氏や、磯水絵氏の指摘[25]があり、管絃に関する忠実の言談記録があったであろうことや、忠実の言談が極めて権威あるものとして尊重され続けたこと、忠実自身も管絃に携わり、造詣が深かったであろうことが指摘されている。したがって、本当に忠実がこのようなことを語ったかどうかは確定できないとしても、この伝承は十分に現実味のあるものであった。摂関家氏長者として一時代を画した師実のように、権威ある人物が実際にその存在を見ていた、そしてそのことを実の孫で猶子でもあった忠実という、やはり貴族社会に重きをなす人物が証言しているということで、「葉二」の存在は確固たるものとして示されているのである。

「葉二」をめぐる伝承は、①から④までの伝承において、すでに「葉二」の過去・現在・未来について十全に語り尽くしていたはずであった。その上で⑤の伝承では、「葉二」が神秘的な姿を持つ名器であり、まさしく実在するものであったこと、改めて補強しているように思われる。ただ、これらの伝承は、話中すでに「葉二」が本来の完全な姿ではなくなっていることをほのめかしていることに現われているように、実態が分からなくなっているからこそ、必要とされた言説のようにも思える。なお『十訓抄』では、⑥において横笛の秘曲や「最物」の列挙が補足されるが、これらは「葉二」のみにかかる内容ではないため、「葉二」伝承に付随させて記す書物は多くない[26]。

このように①から⑥の伝承において、「葉二」の過去・現在・未来を語り、そして神秘性と実在を重ねて強調する記述を備えた「葉二」説話は、『十訓抄』の頃に一定の完成をみた、とも考えられる。そしてひとたび「完成した」説話となった「葉二」伝承は、楽人たちにも広く受け入れられ、楽書類にも取り込まれていったのである。

おわりに

以上、本稿では、「葉二」伝承を概観し、周辺資料にも触れながら読解を深めた。改めて「葉二」説話の構造を確認すると、前半に芸道感応説話、後半に王権・摂関家との関わりを持つ伝承を備えていた。特に『十訓抄』に記される説話では、これらは、単に楽器そのものの権威や神秘性を高めるだけのものではなかった。神秘的な名器がどこからきて、誰の手を経て、いまどこにあるのかを語るという、「葉二」の過去・現在・未来に及び、人々

が名器に寄せる思いを十全に語るものであった。このような「完成した」説話であるために、「葉二」伝承の中では『十訓抄』の形のものが、後世に強い影響力を持ち、特に、楽書に流入し、楽家の伝承の中に組み込まれたようである。また一面では、宝物喪失説話の性格も帯びることとなり、『続古事談』のような尚古的な思想とも通じるものを看取させることとなった。

楽家の伝承では、それぞれの家や流派の正統性の主張のために、説話伝承の中で、名器としての名前などの要素が付加されてゆく場合もあるが[27]、今回みてきた横笛「葉二」については、実体と名前が先にあって説話が付随していったようである。そして、名器としての霊異や、王権・摂関家との関りを語る説話が付随することで、名器として権威付けられたものと考えられる。このような性格の伝承も、名器伝承の型の一つのあり方といえるかと考えている。今後も、名器をめぐる伝承について、様々な観点から考えを深めていきたい。

（付記） 本稿は、二〇二一年度説話文学会大会における口頭発表をもとにしている。発表に際し、ご教示いただいた方々に厚く御礼申し上げます。

【注】

（1）稲垣泰一「鬼と名楽器をめぐる伝承」（東京教育大学中世文学談話会編『峯村文人先生退官記念論集　和歌と中世文学』一九七七年）。

（2）『御堂関白記』寛弘七年（一〇一〇）正月十一日、同寛弘七年（一〇一〇）正月十五日裏書、『殿暦』康和二年（一一〇〇）正月廿二日、同康和三年（一一〇一）十二月廿五日。

（3）豊永聡美『中世の天皇と音楽』二〇〇六年、吉川弘文館。

（4）磯水絵『説話と横笛―平安京の管絃と楽人―』二〇一六年、勉誠出版。

（5）拙稿「篳篥「海賊丸」説話の諸相―『続教訓鈔』所載名器伝承の一考察―」（『言語文化学研究　日本語日本文学編』十六号、二〇二一年三月）。

（6）引用は新日本古典文学大系『江談抄・中外抄・富家語』（後藤昭雄・山根對助・池上洵一校注、岩波書店、一九九七年）所載の『江談抄』原文（底本は類聚本）による。古本系では神田本三一、水言抄一六一、前田本五五に記載される。

（7）引用は新編日本古典文学全集『十訓抄』（浅見和彦校注、小学館、一九九七年）による。以下も同じ。

（8）該当する箇所は次の通り。引用は日本古典全集『続教訓鈔』（正宗敦夫編纂校訂、一九三九年）による。引用個所は、本文より字下げされており、「葉二」説話に対する注記と考えられる。

　但此記頗ル不審也、博雅ハ浄蔵ヨリノチノ人ナリ、生年トイヒ、死去トイヒ、コトノホカノ相違ナリ、

　浄蔵ハ寛平三年辛巳生ル、康保元年十一月廿一日入滅、〈年七十四〉

　博雅ハ、延喜十九年己卯生ル、天元三年九月廿八日薨、〈年

六十二〉

(9) 中世の文学『今物語・隆房集・東斎随筆』（久保田淳・大島貴子・藤原澄子・松尾葦江校注、一九七九、三弥井書店）。

(10) 前掲注（1）稲垣氏論文。

(11) 博雅三位には、篳篥の名手であったとする説話も残されており、このことについては櫻井利佳「篳篥と説話文学―源博雅と篳篥―」（『東洋通信』四八巻七号、二〇一一年十月）に詳しい。

(12) 同話を掲載する他書も含めた異同については次の通り。

・後一条院と入道殿…『江談抄』

・後冷泉院と入道殿…

神田本『江談抄』、『夜鶴庭訓抄』、『説経才学抄』、『二中歴』

・内裏（内）と宇治殿…『十訓抄』、『東斎随筆』

(13) 中原香苗「楽器名物譚の伝承」（『説話文学研究』三十四号、一九九九年五月）、福島尚「『十訓抄』の出典からの話題形成に関する覚書―『奥義抄』『和歌色葉』と関係する話題よりの考察―」（『説話論集』七、清文堂、一九九七年）。

(14) 天福元（一二三三）年に成立した『教訓抄』には、「浄蔵大徳ハ、朱雀門ノ辺ニシテ、笛ヲ吹シカバ、楼ノ鬼高声ニシテ、カムジテ、ナヲラフエトナノル。〈件笛、宇治宝蔵ニアリ。〉」とあり、「葉二」に付随する説話かどうかは示されていないが、同話とみることができる。『十訓抄』の成立よりも三十年ほど早い段階で、『十訓抄』のようなかたちの説話が知られていた可能性がある。なお、『教訓抄』の本文引用は、日本思想大系『古代中世芸道論』所収『教訓抄』（林屋辰三郎校注、岩波書店、一九七三年）による。

(15) 引用は、新日本古典文学大系『枕草子』（渡辺実校注、岩波書店、一九九一年）による。

(16) 引用は大日本古記録による。『御堂関白記』『殿暦』の引用は以下も同じ。

(17) 前掲注（3）豊永氏著書。

(18) 森正人「宇治　伝承的「平等院宝蔵目録」」（矢野貫一編『日本発掘』一九八五年、象山社）。

(19) 田中貴子「宇治の宝蔵―中世における宝蔵の意味」（『外法と愛法の中世』二〇〇六年、平凡社）。「宝蔵」と「経蔵」は厳密には異なるものであるが、田中氏は、伝承的イメージとして表現する際は、実際の建造物に、必ずしも対応して呼び分けられていたのではないことを指摘しており、本稿もこの指摘に従う。「葉二」伝承についても、『十訓抄』では「平等院の経蔵」であるが、『教訓抄』『愚聞記』では「宇治の宝蔵」となっており、揺れがある。

(20) 『太平記』十四などによれば建武三（一三三六）年。

(21) 正倉院事務所編『正倉院の楽器』一九六七年、日本経済新聞社。

(22) 正倉院には尺八も収められているが、尺八に小枝はみられない。横笛と同様、尺八にも彫石尺八、玉尺八、牙尺八といった、材質が竹ではないものがあり、竹の節などが再現されるが、やはり小枝はみられないので、小枝については横笛に特徴的なものと考えられる。なお、材質がその楽器の本来のものと異なるものも、本来の材質で作られた楽器の形状を忠実に再現することについては、現代においてもプラスチック製のリコーダーや龍笛などにあてはまる。

(23) 林謙三「正倉院資料による楽器の全貌」（『正倉院楽器の研究』一九六四年、風間書房）。

(24) 増記隆介「藤原道長と正倉院宝物」（増記隆介・皿井舞・佐々木守俊『天皇の美術史1　古代国家と仏教美術　奈良・平安時代』二〇一八年、吉川弘文館）。

(25) 田村憲治「藤原忠実の言談―衣服・管絃をめぐる―」(『中世文学研究』二十四号、一九九八年八月)、磯水絵「知足院関白の音楽活動について―その記録と伝承―」(『説話と音楽伝承』二〇〇〇年、和泉書院)。

(26) 『十訓抄』の横笛の「最物」に名前が挙がる「青葉」については拙稿「横笛「青葉」伝承の生成と流布」(『日本語日本文学論叢』十三号、二〇一八年二月)も参照されたい。

(27) 前掲注(5)の拙稿のほか、近年の研究発表に、根本千聡氏「院政期の篳篥をめぐる説話と秘曲」(二〇二一年度説話文学会大会)がある。

(せのお　えり・本学博士後期課程在学)